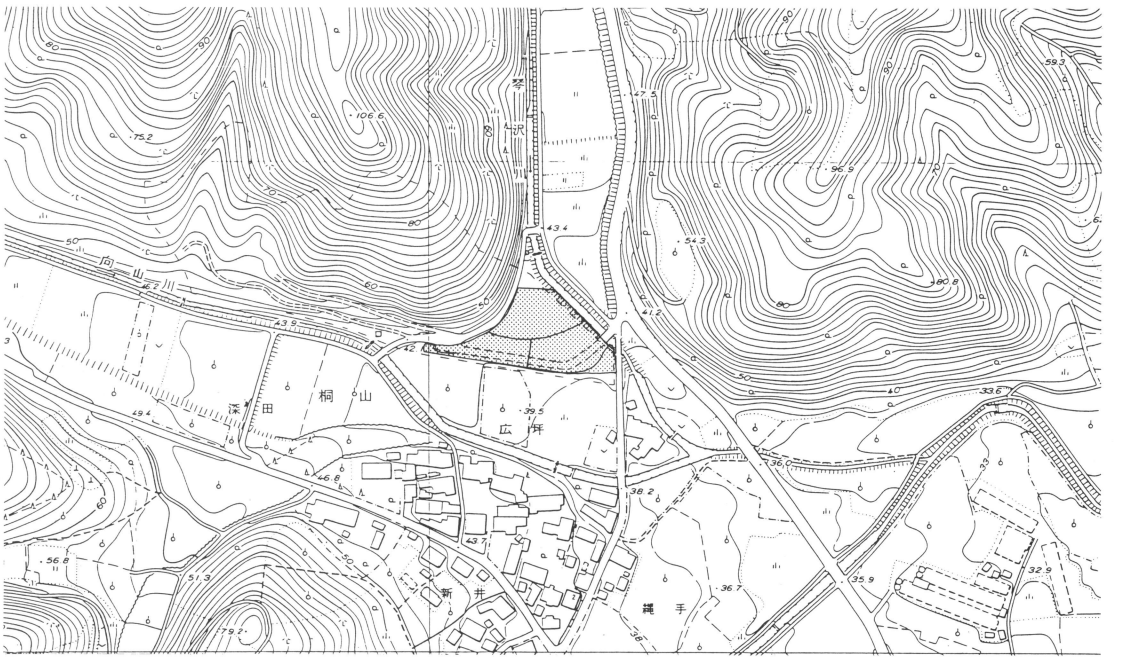
広坪遺跡（ひろつぼいせき）

調査の経過　広坪遺跡は、額田郡幸田町大字桐山字広坪地内に所在する。琴沢川と向山川に挟まれた丘陵端部に位置し、標高は約38mである。本遺跡の発掘調査は、一般国道23号岡崎バイパス建設に伴う事前調査として、建設省中部地方建設局名四国道工事事務所より、愛知県教育委員会を通じて委託を受け、調査面積4,200m²を平成5年9月から平成6年3月にかけて実施した。調査にあたっては、工事日程なども考慮して調査区をA、B、Cの3区画に分けて行った。

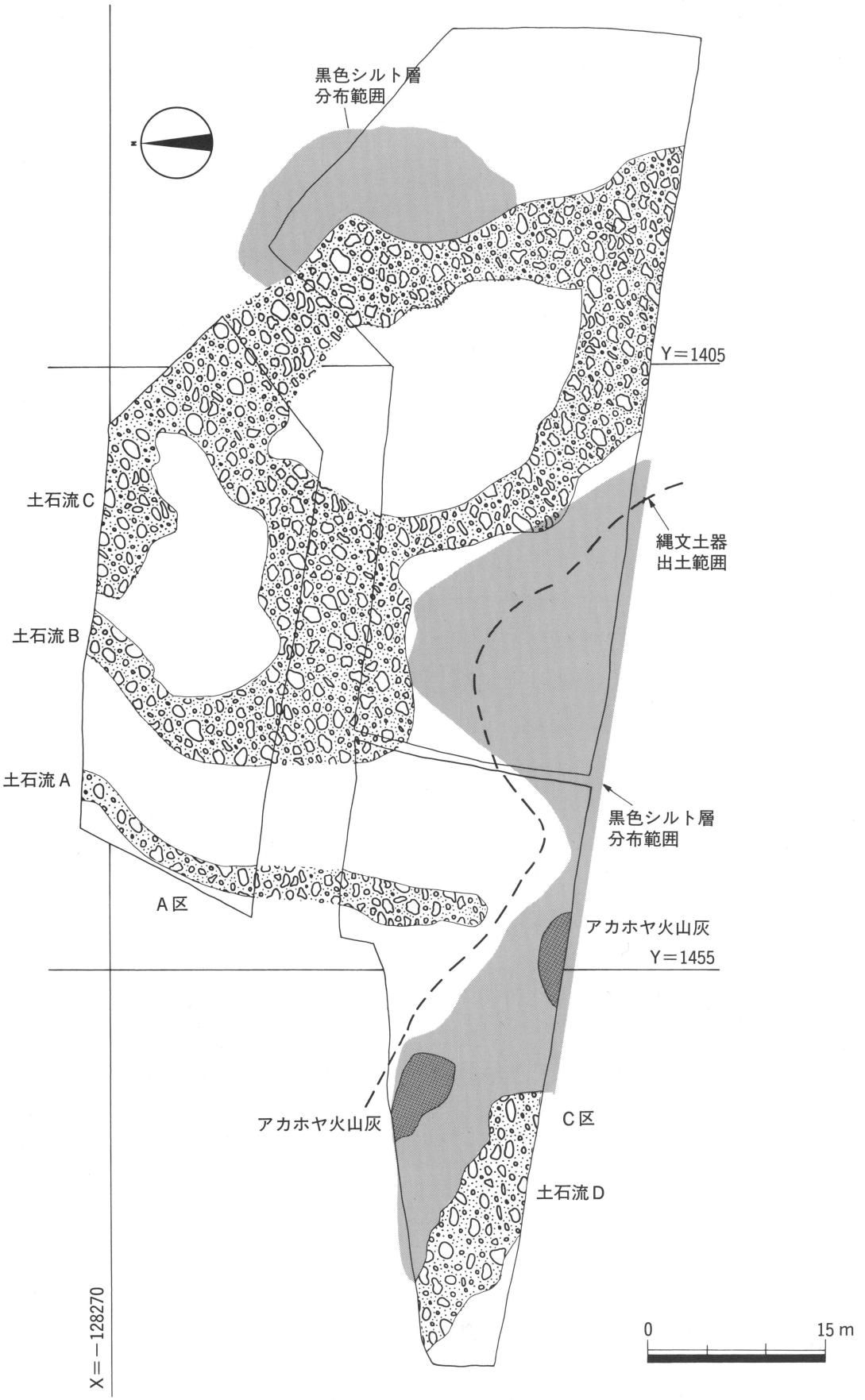
（神谷知幸）

調査の概要　調査区は北は琴沢川と西は向山川にはさまれる谷底平野（土地条件図による）に位置し遺跡北西には丘陵地をひかえている。遺跡の層位は、両河川により形成された砂層と砂礫層の互層を基本とし、B区東部と西部及びC区にかけては、黒色シルト層の堆積が認められる。B区東部の黒色シルト層は北西部が厚く、南部及び東部が薄くなっており黒色シルト層に代わって下層に堆積している灰褐色シルト層が厚くなっている。B区西部の黒色シルト層は北部が薄く、南に下がるにつれ厚く一部溝状にくぼみを持っているところがある。C区中央部の黒色シルト層は、調査区を南北に横断する様に広がっており、南部では谷状に深く落ち込み、最も厚いところで最大120cmを測る。

このC区黒色シルト層中に、アカホヤ火山灰の堆積を確認した。特に、南部の谷状の落ち込みには厚く堆積しており、最大で厚さ26cmを測る。火山灰層は黄橙色と明黄褐色の2層に分かれ、下層の黄褐色層は薄く火山灰下降時の一次堆積、上層の明黄褐色層は周囲からの流れ込みによる二次堆積と考えられる。



第1図　遺跡位置図（1/5000）



第２図　調査区略測図（Ｓ＝1/500）

また、調査区の広い範囲にわたって土石流によって形成されたと考えられる溝状の砂礫の堆積層が検出されている。この土石流による堆積は４条確認されており、便宜上、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄと呼称する。土石流ＡはＡ区西部からＣ区北部にかけて南北に走っており、幅約２ｍ、深さ約70cmを測る。土石流Ｂ・Ｃは、Ａ区の南東部で１条になり、Ｂ区に入って２条に分かれ、再びＢ区の南で合流するという蛇行線を描く。土石流Ｄは、Ｃ区西部で検出され幅約６ｍを測る。

本遺跡から出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、灰釉陶器、灰釉系陶器等がある。

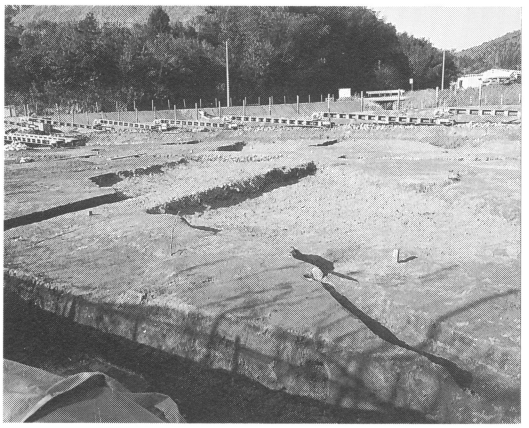
縄文時代の遺物は、早期と中期初頭のものがある。早期の土器は押型文土器（第３図３・４）と繊維痕を残す貝殻条痕文土器である。また、中期初頭の土器は、半截竹管による隆帯に爪形の連続刺突文を施したものやヘラ状具による三角状の連続刺突文を施したもので、北屋敷式に比定されるものである。（第３図５～11）。石器は石鏃（第３図１・２）と黒曜石等のチップなどが出土している。

弥生時代の遺物には、欠山式を主体とする台付き甕、壺等がある。これらの遺物は、土石流Ｂ・Ｃ及びＢ区東部の黒色シルト層より出土している。

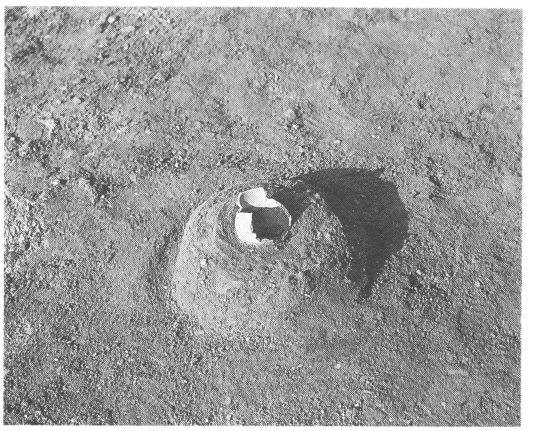
灰釉陶器は、井ケ谷78号窯式から黒笹90号・折戸53号・東山72号窯式までと幅広くみられる。器種は瓶が２点出土している以外はすべて椀である。灰釉系陶器も鎌倉期から室町

調査区遠景

土石流Ａ



土石流Ｂ

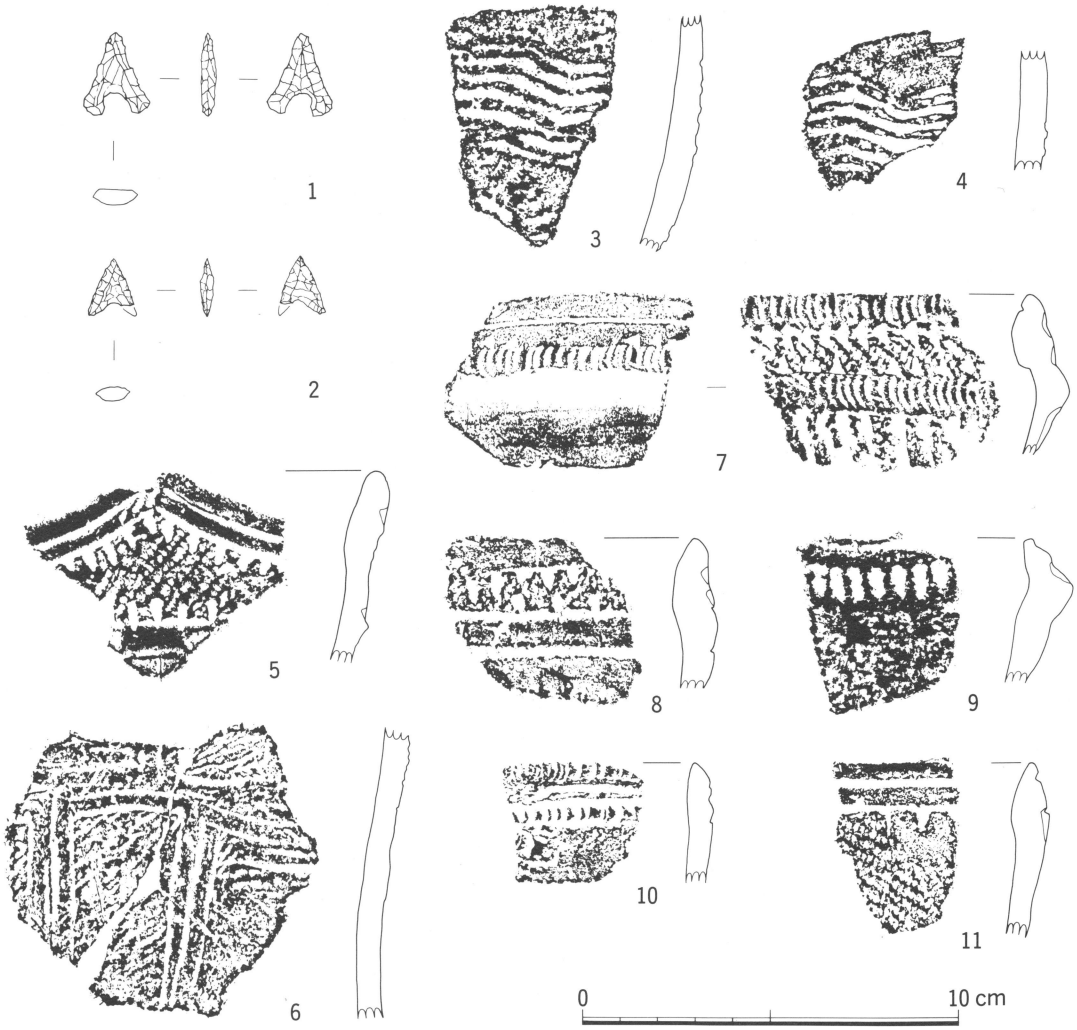


弥生土器出土状況

期までの幅広い中でとらえられるが、灰釉陶器も含めてその出土数は縄文・弥生土器と比べ少ない。

アカホヤ火山灰の火山ガラス
1辺0.25㎜程度の大きさの火山ガラス中央に褐色のガラスが見られる。

まとめ　広坪遺跡は、出土した遺物から縄文、弥生、平安から室町時代にかけての複合遺跡と考えられるが、各時期をとおして明確な遺構は検出されなかった。しかし縄文時代については、当地域でも類例の少ないアカホヤ火山灰を検出したことが特筆できるだろう。特に今回の調査では、火山灰層の下層と上層からそれぞれ縄文早期と中期初頭の遺物が出土している。早期の押型文土器は、当地域でも類例が少なく貴重な資料である。また、各層の時期的な位置づけも比較的明確になっていることから、花粉分析、プラントオパール分析等の自然科学的な分析により、当時期の自然環境の変化を明らかにする上でも重要な資料が得られたといえる。　（水谷寛明）



第3図　縄文土器・石器実測図版